

# 新しいフレーベルの発見

東京大学教育学部教授 海 後 宗 臣

## 一

私は今から約二十五年前明治初年の教育文献の研究を行った際に、幾つかの幼稚園についての文献を手にした。その中の一つに関信三の編集した『幼稚園法二十遊嬉』という冊子があつた。これは明治十年三月刊のものであるから、約七十五年前の刊行物であつて、わが国における初期幼稚園文献の貴重な一つである。

この冊子はその名称が示している如く幼児保育のための遊嬉二十種を絵解きをもつて示したものである。その遊びは恩物の扱方である。フレーベルの創案になる恩物の絵をかゝげて簡単に説明し、子供がどのようなにしてこれを用いるかにつ

いて書いてある。当時としては珍らしい銅版印刷であつて、極めて興味深い保育文献といわねばならない。このような恩物の解説としては勿論日本最初の文献であるから、当時としては多くの幼児教育者に参考として用いられたものと思う。

私はこの古い文献に特別な興味をもつたのであるが、それは珍らしいというだけではなかつた。実はフレーベル恩物は十九世紀教育思想の講義で学生時代に既に知つてはいたが、このように近代生活の核心をえぐつて、然かもこれを子供の遊びとして豊かに展開している直観とその技術に全く心を奪われた。その恩物の性格を一つ一つ検討するにつれて、何んと精細な考えと深い洞察に基いたものであるかを考えさせられた。それを探求するにつれてフレーベルが十九世紀前半

期において展開したロマンティックの如何にすばらしいものであるかにすっかり心を打たれた。フレイベルの偉大さを発見したのは私にとつてはこの時であつた。

更に私をフレイベル恩物の解釈へと向寄せたものは、私が郷里水戸において今から四十余年前にうけた幼稚園教育である。関信三の恩物解説を見ながら、私は幼い時代の幼稚園における指導、特に恩物の幾つかを思い出して、その古い記憶をよみがえらしては、改めて恩物のもつている意味を考えさせられた。私はこうした恩物への探求をなし得た出発点が幼稚園で保育をうけた経験にあることを知り、改めてその当時の幼稚園の教師に謝意を示さざるを得ない。

この恩物に考を集中したその頃、私はフレイベルの恩物は単なる玩具ではなくして、子供が成人して勤労者となる際に、仕事について生産にあたる際の技術の基礎教育をしようとしているものではないかと考えていたからである。第十九世紀の初期から展開された教育思想や実践の多くはこうした生産技術に連関をもつているからである。フレイベルの恩物もこうした時代において生産への基礎教育をなしつゝあるものと推測していたので、恩物の一つ一つが担つている社会生産の意味に探求を集中せざるを得なかつた。

フレイベルの恩物は教育史上において極めて著名なもの一つであつて、多くの教育者特に幼稚園の保育関係者には普ねく知られているものである。私はその一つ一つよりも全体を貫いた一つの綜合形体に驚かされた。恩物は三つの主要な類別によつてその性格を明らかにすることができる。第一は物体であつて、第一より第六までの恩物がこれにあたる。次に第七より第九までは、物体を分析してこれを面・線・点に分けたものである。更に第十は構成であつて、これらの面・線・点で一つの形をつくりあげるものである。これらによつて近代的な技術の体系が整然と立てられている。

物体についての基礎陶冶をなす第一類は毬を第一恩物としている。この毬は球状をなし統一をもつた形を現わし、総べての事物の本源となるものである。この毬が六つ用いられているが、それが六色に分けられていて、赤、黄、青とこれを合せた色でつくられ、それぞれに個性をもつているものとして、子供にとれるようにしてある。色彩によつて区別される物体であるが、何れも一つのまとまつた球体をなすことによつて統一されていることが意味をもつている。子供はこれを糸にて棹からさげて様々に動しては、他の毬との關係を学習できるようにしてある。成る程このような球体の玩具は子供が心から手にして楽しいものではあるが、それをあらゆる形体についての学習の第一歩としたところにフレイベルの恩物

纏をうかがうことができる。

第二恩物は球と円錐と正立方体の三つである。これは物体をつくりあげる基本となる様式であつて、あらゆる事物がこれらの一つ或はその組み合わせによつてできてゐるので、これを用いて物体の認識とこれを生活に用いる基礎訓練を与えようとしてゐる。第三恩物は正立方体八つである。これをならべて学習するのであつて、数の訓練をなすのを目的としてゐる。第四恩物は長立方体八つであつて、これは広さを学習させるためのものである。第五恩物は立方体二十七であつて、その中三つは対角線で二分され、他の三つは対角線で四分されてゐる。これを用いて学習するが、その目標は均齊についての感覚を得させるためである。第六恩物は長立方体二十七であつて、そのうち三つは縦に二分され、六つは横に二分されてゐる。これは比例を学習するためのものである。これらは極めて体系的であり、数学的に工夫されてゐて、その科学的で精細な分析によつてゐることは注目される。

第七恩物は面についての学習をするものであつて、正方形と等辺三角形の板片でつくられ、これをならべて技術の訓練がなされる。第八恩物は線についての学習をなすものであつて、直線と円形とを用いるが、直線は細長い木片を用い、円形は金属の環を用いるのである。第九恩物は点についての学習をさせるもので、大豆、小石、厚紙を用いて、点の性質を

感覚させようとしてゐる。第十恩物では面・線・点を合わせて一つの物体をつくるのであつて、敷かい豆・ろう製の小球・とがつた箸、むぎわらを用いて構成を行わせる。これらの恩物は遊びの基礎になるもので、これらの原則によつて、様々な作業品をつくりあげてゐるのである。

作業によつて種々な物体をつくりあげるためには、これを学習の種別によつて次の如くに行つてゐる。物体をつくるためには粘土、原紙細工、木工などがあり、面のためには紙を折ること、紙を切ること、寄木細工等がある。線のためには組み合せ、編み合せ、織り紙、糸あそび、ししゅう、図画などがある。点についての学習としては南京玉などを紐に通す方法などが行われた。これらは作業によつて何かを製作する遊びであつて、恩物を実地において試みたものである。

以上は恩物の大要であるが、フレイベルがこのような技術学習の基本となる様式をつくりあげ、それで幼児の保育をなしたことは、教育技術を展開してこれを彼の教育観に即応させたものとして、フレイベル百年祭の今日改めて思い出さねばならない。

### 三

我々はフレイベルの恩物とその全体系とを明らかにすると、彼は何のためにこのような恩物をつくるようになったの

か、その理由を探索しなければならなくなる。何を目的とし、何を考えて未だなかつたこのような遊具をつくつたのであろうか。これについては様々な考があつて、それぞれにフレーベルの意図しているところをさぐらうとしている。

第一の考えはこれはフレーベルが子供の遊具をつくり、喜んでこれを手にすることができるようにしたものであると見るものである。これは恩物を玩具の一つであるというように極めて簡単に、それ以上何等の意味をもたないものと解釈している。フレーベルが第一恩物の趣を思いついたのはブルグドルフの近くの芝生の上で子供が趣で遊んでいるのを見て、感ずるところがあり、これを子供に与えて物体の基本となつてゐる球を楽しんで遊ぶ間に感覚させようとしたことなどから考えると、恩物はこのような玩具となつてしまふであらう。

第二の恩物観は極めて高尚なもので、これは内的生命が物によつて表現されたものであると見る解釈である。即ち人間の内奥にある精神が物をもつて自からを限定したものであるとし、その意味で神性をもつたものと解釈するのである。神によつて創造がなされると同様に、森羅万象の現実化されたものとして考へている。これはフレーベルが『人間教育』の中で恩物を説いている如くであつて、シェリング哲学による哲学的な解釈をなしたものである。即ちフレーベルの思想によつて、理解する普通の考え方であつて、多くの恩物解釈に

見られるものである。物体は神の姿を現わすと理解する同一哲学によるので、神が創造する如くに子供が恩物によつて物をつくりあげるとして、恩物による創造を重く見るわけである。これは重大な一つの理解で恩物はこのようなものとして成立したと立論して誤らない。しかしこうした神的なものとして崇高な性格を恩物に与えるのみでよいであらうか。これは恩物論の上で問題となる。それでは神の世界からこれを下界に引きおろして解釈するならばどうなるであらうか。こゝに恩物についての自然科学的な考え方があつた。それはフレーベルが自然科学の研究を重ねた人であるところから、恩物の形体は自然物の科学的な分析によつて作りあげられたとするものである。特にフレーベルが結晶学についての研究をした人である点に注目して、恩物を結晶学から組み立てたとしてその性格を決定する考へが成立する。実際フレーベルは一八二一年にベルリンでワイス教授の講演によつて結晶学に興味をもち、後に助手となつて研究した。それによつて結晶学によつて人類の発達を見ることが彼の著作の中に説かれてゐる。

これについては彼が自伝の中で「人間はただに自然の形と姿との多様性を認識するだけでなく、自然の統一、自然の内的活動を理解する。……彼等は彼の遊戯において自然の創造過程を模倣する。最初の自然形成物、即ち自然の固形体は結

晶体である。彼等は喜んで自然の最初の活動を模倣する。結晶体はつくりあげられた物であるが、子供はそれを構成する。」と述べている如く、恩物の構成を結晶体がつくられることと結びつけて同じものと見ているのである。

この類推は当時の自然と人間についての思想としては珍らしくはないが、我々はこうした自然と人間活動の同一解釈で恩物を見ていことはできない。更にそれよりも重要な解釈が残されているものではないかと考える。

#### 四

私はこゝに恩物は何のために考案されたかについて第四の解釈を立てようとする。それは恩物による幼児の保育は、庶民の労働とその仕事への発展を考へての基礎陶冶であると見るのである。これは恩物を神的なものとして高い解釈をしていたのが国のフレーベル理解に対して極めて卑近な解釈と見られるかも知れない。しかし今日はフレーベルを庶民的なものとして新しく発見しなければならぬと思うので、敢えてこの理解をこゝにとりあげるのである。即ち生産活動をめざしての基礎的な学習としてとりあげようとしている。

フレーベルが恩物その他の物を用いてなす作業教育を重視して、こゝに教育方法の重点を置いたことはペスタロッチの作業教育思想とならべて教育史上注目されてきたことなので

ある。従つて彼は恩物を用いて様々な仕事をさせることは、工場で働く人々や百姓などの仕事への技術訓練であると明言している。従つてこの生産への恩物解釈は私がこゝで觀念的につくりあげているものではなく、フレーベル自身の言葉がこれを確言しているのである。即ち「この教授法は眼を通して物の形及び均齊に関する知識を与え、又手を訓練して此知識を外部に表現することのできる技能を与えることである。現にわが国民殊に職人や農夫などが形と均齊とを知覚し又これを表現する力の発達していない為に、非常な不利益を感じていることは、多くの人々の常に嘆じていることではないか」と『人間教育』の中に述べている。

このように技術の教育が必要であるのに、一般にはこの点を問題としてとりあげて、組織ある学習として体系づけるものがないことを嘆いて次の如くに言つている。「今日の家庭の有様を見ると外部的作業や生産的活動を各方面に自然的合理的に発達させることに關しては極めて皮相的で且つ無秩序である」と述べているのではないか。こうした生産に対する積極性の欠けた教育の実情は百年を経た今日の日本の家庭にもよく適合している。子供の遊びにおける活動が将来の生産へ結びつくように技術の学習を体系づけようとする意欲などは、今日果して何処にあるであらうか。フレーベルはそれを一世紀以前に提唱しているのではないか。

フレイベルは自から恩物を考案しては工夫を重ね、次第にこれを豊富なものにつくりあげて行つた足跡をふりかえり、どのようにして恩物を完成したかを次の如くに語つてゐる。

「私達はこのように紙の上へ形をつくることから、紙そのもので形をつくることへ、次いで厚紙で形をつくり、そして最後には木で形をつくることへ進んだ。私の後年の経験は私に形式及び造形に必要な尙ほ多くの材料を知らせてくれた」と自伝の中に述べてゐる。これは恩物が単なる神の象徴としてばかり見ていたのではなく、如何に庶民の作業に結びついたものであるかを示している。それを一つ一つフレイベルの教育直観で子供の遊びとして編成したかが、明かに認められる。

恩物が如何に生産機式と結び合つてゐるかについては、その幾つかをとつてこれを判定することができるであらう。紙を形に切りぬく仕事や寄木細工などはそのまま直ちに工場での生産活動に結びつてゐる。木材板工業から金属板を用ゐる工業においても、これを切つたり、重ねたり、組み合わせたる技術を必要としてゐる。それらはそのままで幼児のうちから恩物で育成できるようになつてゐるのではないか。このフレイベルの優れた智慧を先ず認めねばならない。線を取扱つた多くの恩物は紐維についての工業における技能と如何に深く結びつてゐるか考えてみると実に偉大なる構

想である。織紙の如きものが今日の紡織の原理そのままであつて、それを色紙で行つてゐる。子供は遊戯として熱心にやつてゐるその間に紡織に必要な基礎技術が習得されてしまうようになつてゐる。

フレイベルは石板の上に網形の目をつくつて幼児がこゝに縦横の線を引いて図画学習をする考えが示されてゐる。これは幾何的な図形学習を求めたものである。然るに最近はこのように形にとらわれた学習は望ましくないと、図画は自由絵画の形へ近くなつてしまつてゐる。こうした実情にはあるが、フレイベルはこの線上の図形学習を高等の諸学校では独立の教科として、或は他の学科の一翼として認めさせることについての見通しをもつてゐた。現代の学校ではこうした学習は独立した図画学習の中に含まれてゐることと定められてはゐるが、著しい發達をしてゐるとは言えない。しかしフレイベルがこの時代に製図作業の一部に發展する学習を立ててゐたことは注目さるべきであらう。この点でも彼の学習作業の企画が如何に近代的な考えによつてゐるかが明かにされる。かくの如くに子供の遊びが社会における生産によつて後から支えられて少しづつ進歩するためには先づこうした恩物を理解しうる教育観を確立しておかねばならない。それをフレイベルが切り開いて近代的な生産の基礎たらしめこれを教育における生産性の実現としたことには敬服せざるを得ない

## 五

私はフレイベルの恩物を取りあげて、それを解釈することによつて、新しいフレイベルのあり方を発見したと考える。それは実はフレイベルが百数十年前に確立していたことで、何等新しいことを私が附加したわけではないのである。日本の教育学者がフレイベルを解釈することにおいて余りにもこれを高い哲学的なものとし、恩物も神的な理解の一面を、強調してきていた。これはフレイベルがもつていた貴い哲学ではあるが、しかしこれと共に現実的な地上的な他の一面をもつていたことを確認すべきである。これは第十九世紀前半におけるヨーロッパの産業変革による生活の著しい改造、それがフレイベルの思想の裡にあつて、子供をこころしいた産業人たらしめる教育へと進歩させていた。この一面を日本のフレイベル観がとり失つていたのである。そして恩物の地上的な理解を正しく受けとることができなかつたのであつた。それは日本社会が近代化からとり残されていて、そこまで考えが結びつかず、唯恩物や保育法の外形をとつて充分な意味を担わせることができなかつた為である。このためにフレイベルを同一哲学の基礎から解釈して、シェリング的な神学的な理解にのみ走つてしまつたのである。それはフレイベル解釈を徒らに高尚にして単に一つの思想にすぎないとさせたのでは

ないであらうか。この意味でフレイベル百年祭にあたり、日本のフレイベル解釈が新しい一つの発見をつけ加えてほしいと思う。

しかし我々は恩物を通してフレイベルの事業が近代産業技術を基礎としていたことを確認して、日本が忘れていたフレイベルの一面を解釈し直すことを要するばかりではない。更に第二の新しいフレイベルを発見しなければならぬ。それはフレイベルの時代と今日とは既に百年の時間の距りをもつてきている。生産の技術はこの間に著しい発展をした。特に動力としての電気が自由に使用できるようになつた二十世紀の生産はフレイベルの時代とは驚くべき変化を来している。更に新して原子エネルギーも用いられようとしている。若しもこれが動力として正しく駆使されたとしたならば、新しい産業革命が来るであらうと推測されている。こうした時代に我々は唯単に百年前の恩物とその意味とを発見したのでは不十分である。

今日の幼児保育には新しい恩物が求められているのではないか。それは恐らくフレイベル考案のものばかりではあり得ないと思う。我々は新しい今日の恩物をフレイベル百年祭にあつて発見しなければならぬ。それこそ第二の意味において今日求められているフレイベルの新しい発見である。フレイベルはドイツが立ち後れながら当面していた生産技術進

展の胎動の中から、子供の学習の組織的な第一歩を恩物によつて開始した。この恩物を体系づけそれを一人でも多くの子供にもたせようとして、自から工場をつくつて恩物を製造頒布した。こうして保育の優れた方法のために精進したフレールを今日新しく見直さねばならない。

われわれはフレールの輝かしい業績を彼が残した恩物によつて回顧すると共に、今後の新しい生産に結びついた基礎陶治を正しく今日の子供が喜ぶ仕方において保育の中に工夫しなければならぬ。それはフレールが求めた道であるが、それを荒廃したこの戦後の日本において、生産を通しての国土復興として跡づけなければならぬ。それはフレールを遙かなる敗戦日本において祭る最も重要な意義であると考えらる。

その道に精進するために、フレールの言葉をもつてこの論文を結びたい。「子供が様々な遊戯をしたり、物を造つたりするのは、子供が喚かせる最初の花で、この時期は将来における生産活動の準備をなすべき時である。子供はどのような身分、地位のものであつても、一日に少くとも一時間か二時間は一定の仕事即ち作業に従事すべきである。今の子供はむやみにわけのわからない運動ばかりして一向に仕事をかえりみないようである。ところが実を言えば仕事をする方がどれだけ深く解らせ、兒童の発達を助けるかも知れない。

今日の子供や両親は作業を軽んじて、それは子供の将来にとつて余り大切なものではないと考えている。この考えは教育機関の力で追い払つてしまわなければならない。実に現代の学校や家庭での教育は頭ばかりをつくらうとして、子供を作業に對して冷淡にし不活発にさせている。このため大いに発達すべき人間の能力が少しも発達しないでいる。子供にとつてこの損失は莫大なものがある。」

これはそのまゝで今日のわが国の教育に對する批判であり新しい方法の提唱となつてゐる。その際にフレールはこの仕事を信仰と一つにした。「宗教心を早くから養成する必要があるように、作業上の訓練も早くから与えられることが至つて大切である。作業の本義に従つて早くから仕事をさせるのは、宗教心を固くし、これを高める所似である」と教えている。子供が物を用いてこれで創造しようとすることは宗教心をつくる崇高なこと一つになつてゐる。このところにこそフレールの作業の提唱や恩物をもたせた真義がある。それは靈のない実用のみ作業観へ重大な教訓をたれてゐる。

(特に執筆を謝す。編集者)